Vol.51

# 麗和サッカークラブニュース

平成30年5月13日発行　発行人 麗和サッカークラブ会長 関根弘之

**会長 関根弘之（23回）**

いつになく桜が早く咲き、連休の喧噪も終わって若葉が濃さを増してきました。私が住んでいる台東区入谷は浅草や上野公園に近く、これから氏神様の祭りの季節が始まります。浅草の三社祭はあまりに有名ですが、氏子たちが稽古するお囃子が近くの神社から聞こえてきます。

さて、桜が散り始めた３月の下旬に道後温泉に行ってきました。道後温泉本館から歩いてほんの数分のところにある812年創建の古刹円満寺が目的でした。円満寺は浦和高校を全国優勝に導いてくれた宮川博先生（昭和２５年４月～４８年３月浦高在職）の菩提寺であります。私が２年の時（昭和４４年度）に担任をしていただいたこともあり、同期（高23回）の者も含め卒業後も長くおつきあいをさせていただきました。現在は先生の奥様がご高齢ながら住職としてお寺を守っておられます。HPでも道後のパワースポットとして紹介され、境内にある「湯の大地蔵」には、若い女性が「縁」を求めてお参りする姿が増えてきました。道後に行かれる際はお立ち寄りください。お話好きの奥様から、在学中には知らなかった大人の話が聞けるかもしれません。

円満寺

今年の1月に話が戻りますが、7日に行われた「初蹴り会」で菅野一郎（高1）さんから文書を預かりました。「麗和サッカークラブニュース寄稿の件」という書き出しで始まり

「紀行文の冒頭で述べたように、クラブの行事に参加しているOBの中では最高齢となり、「会費・寄付金」納入者一覧の中では、旧制中学校卒業者の氏名が消えてしまい、私の氏名が最上段に記されるようになってしまいました。

そこで脳裏に浮かんだことは、旧制中学～新制高校在学体験のある人も少なくなってしまった今、若い後輩諸君が部史をつぶさに読んでいるとも思えませんので、八十代も半ばを過ぎた超高齢会員として、旧制中学校蹴球部の先輩方が歩んでこられた足跡を語り継ぐ最後の機会であると感じた次第です。

先輩諸兄からお聞きしたり、実際にこの目で見たものは数多いのですが、それらは部史に記載されていることと思い、今回にはそれらの中で私が最も印象深く記憶している2話を私なりの文章表現で寄稿させていただくことになりました。　以下略。」

本文は、A4で4ページになるので数回に分けて連載することにさせていただきます。現役情報の場所がなくなってしまいますが、HPに頻繁に掲載しますので、今回はご容赦ください。次号からは他の内容とも併せ掲載方法も検討させていただきます。

## FCレイワ

**浦和支部3部リーグ**
3月18日㈰第1節
VS UJ.ボルケリーノ4-1
佐藤匠3,高柳臣克1
1金子 3本田 19岩下 13山下 27髙坂 4神宮 16山嵜
24公平 2鈴木 9佐藤 15篠原
交代13山下→8高柳,19岩下→17阿部
4月1日（日）第２節
vsONM　5-0
得点　永井、高柳、鈴木、松浦、出浦
岩下　髙坂　西　本田　山下　高柳
山﨑　鈴木　永井　吉田　松浦
髙坂→神宮、高柳→出浦、山﨑→中山

**4月30日（月）第3節**
vsフェニックス朋友10-0
得点者　松浦×4　永井×2　篠原×2　高柳　鈴木
吉田　髙坂（→吉羽）　岩下（→西）
山下　本田　神宮（→高柳）
公平　出浦　鈴木　永井　松浦（→篠原）

## 2018年度 総会

１．日時　　平成３０年６月３日（日）
２．日程　１１：４５　集合
　　１２：００　若手OB　vs　一年生
　　１３：１５　ベテランOB紅白戦
　　（一女OG参加）
　　１４：３０　通常総会
　　（麗和会館２F会議室）
　　１５：００　懇親会
＜審議事項＞
（１）平成２９年度　事業・決算報告
（２）平成３０年度　事業・予算（案）
＜報告事項＞
（１）現役報告
（２）その他

○ 社会人1口5,000円　学生（浪人生を含む）1口2,000円
○ 郵便振込 ⇒ 同封の振込用紙をご利用ください。（振込手数料当会負担）
○ 銀行振込 ⇒ 埼玉りそな銀行 さいたま新都心支店 普通 0273349
麗和サッカークラブ（レイワサッカークラブ）
※振込手数料は、ご負担ください。
※必ず卒業回あるいは卒業年度を振込人前に記載してください。
（例）31回 田口智雄

新会員

＊まだ会費未納入の方は、納入をお願いします。毎年度予算目標達成に大変苦労しております。社会人の方は、できる限り2口以上の会費納入へのご協力を何卒宜しくお願いします。

転居等により会報送付先の住所が変更になる場合には、右記の担当者にメールにてお知らせください。

幹事長：田口　智雄
共有メール：reiwasc1923@yahoo.co.jp

# 語り継ぎたい先輩の足跡 （1）

高１　菅野一郎

・はじめに

麗和サッカークラブニュースに同封されてくる「会費･寄付金」納入者一覧を見て、ついに来るべきものが来た感を抱く。それは旧制中学校卒業者の氏名が消えてしまい、私の氏名が最上段に記され、中学～高校在学経験者は残すところ僅かとなってしまったからで、旧制中学校は遠くになりにけりということである。

斯くなれば、入学時は旧制中学校、卒業時は新制高等学校という世代である私としては、「麗和」と題された部史の発刊から４半世紀の歳月が経過していることから、私が知り得た先輩の足跡を後輩諸君に語り継ぐ最後の機会であると感じるのである。

以下は超高齢者OBの単なる懐古趣味によるものではなく、球史に輝く先輩方の頭脳と汗による足跡であると理解願いたい。

・その１　浦和中学校対埼玉師範学校の決戦

若い後輩諸君にとっては、師範学校というのは耳慣れぬ学校名であろうから冒頭で説明し、両校の関係を述べた後に試合模様を紹介した方が理解しやすいと考えた次第である。

師範学校というのは予科と本科を含む専門学校扱いの教員養成機関であって、卒業生は主として小学校教育に携わるのが通例であった。師範学校卒業者には聞いたところによれば、修業年限は予科・本科ともに３年であったということである。

旧制中学校と師範学校には入学時の相違があって、５年生の旧制中学校には小学校卒業後に試験を受けて入学するのに対して、師範学校予科には、小学校卒業後にその延長と考えられる「高等科」(２年生)を卒業した者が試験を受けて入学する制度となっていた。

従って、中学校１年生と師範学校予科１年生とでは２年の年齢差があった訳である。

私は先輩諸兄から「師範生との試合は、２年の差があったので大変だった」という言葉を聞いたことがあったが、旧制中学校は５年生であり、師範学校予科は３年生なので、最上級生の年齢には年齢差が無い訳で、「２年の年齢差」とはいかなるものか理解に苦しんだものである。そこで思い当たったのが以下のようなことではなかったかと推察するのである。

第３８回卒の岩田先輩は師範学校との試合に１年生当時から出場していたそうであるが、それは岩田先輩が小軀ながら抜群のテクニシャンだったからで、５年生の中学校では１年生からレギュラーであったことは極めて稀な例であろう。しかし、技術力抜群の岩田先輩をもってしても、kick and rush　戦法を得意とする師範学校選手の運動量と当たりの強さには対抗するすべも無かったようで、岩田先輩は「技術では負けていなかったが、２年の年齢差は如何ともし難かった」と述懐していたのである。師範学校予科１年生は中学校３年生と同格であったからである。

以上に述べた例とは別に、私には旧制中学校と師範学校が試合をしていたことに疑問を持つのであるが、それは５年生の旧制中学校の大会に、予科３年・本科３年の専門学校扱いの師範学校が、如何なる理由で参加していたのかということである。中学校と師範学校予科の試合であれば年齢差は無いので不公平ではないが、仮に本科の生徒までが参加していたとなれば、それは問題である。師範学校は全国各県に設置されていた筈なので、中学校大会とは別に師範学校大会があっても良いのではないかということである。因みに旧制中学校卒業後に進学する旧制高等学校はインターハイと称する大会を開催していただけに疑問は深まるのである。

1917年(大正6年)の大会を初回とする戦前の全国中学校蹴球選手権大会は、戦後に全国高等学校サッカー選手権大会と改称され、現在では96回大会の長期開催に至っている。

この大会の歴代優勝校を見ると、初回から7連覇を果たし、その後も4回優勝している兵庫県の御影師範学校をはじめとして、1933年(昭和8年)には岐阜師範学校、1937年(昭和12年)には埼玉師範学校が優勝している。そこには何か師範学校有利の要因があるのであろうか？

ここで推察できるのは、なぜ、師範学校が旧制中学校大会に参加したのかというと、旧制中学校と師範学校の間には蹴球という競技種目の普及度に差があり、旧制中学校が大会開催可能であったのに対し、師範学校は普及度が低かった？たえに、師範学校独自の大会開催が不可能ではなかったかということである。このことと関連して、蹴球と同じく野球の大会も行われていたのに、師範学校が戦前の全国中学校野球選手権大会、現在の高等学校野球選手権大会には参加していた様子は窺えず、これらの疑問に対しては有識者に聞いてみたいものである。

長々と旧制中学校と師範学校との関係について述べたが、これは旧制浦和中学校のみならず、旧制神戸第一中学校でも同様の対立関係があったからで、旧制中学校と師範学校との戦いがいかに激しかったかを説明する上で欠かせなかったからである。

現在の県立浦和高等学校は領家の地にあるが、開校当時には現在の知事校舎の位置にあった。片や埼玉師範学校は現在のさいたま市役所・浦和区役所野市にあり、両校は１７号国道を挟んで対峙していたのである。対峙していたと表現したのには理由があるからで、旧制中学校の生徒と師範学校尾生徒はどこでも仲が悪かったようで、文豪夏目漱石の著作「坊ちゃん」には、四国松山の中学生が教師をも巻き込んで師範生と乱闘騒ぎを起こす場面が漱石の軽妙な筆致で描かれている。また、女流作家佐藤愛子氏の父君である佐藤紅緑が浦和を舞台とした小説「ああ玉杯に花受けて」には、浦中生が些か差別的な言葉で師範生を揶揄する場面があったように記憶している。